

## 学位記授与式祝辞

2020年3月24日  
東京大学理学部数学科  
学科長 古田幹雄

本日学位を取得された皆さんに心よりお祝いを申し上げます。ご卒業おめでとうございます。

皆さんは大学入学後、教養学部前期課程において文理に渡る幅広い学問に接してきました。理学部数学科への進学が内定した2年生の後半では、その後の勉強の基礎となる科目を演習とともに学び、数学科の専門的な議論の洗礼を受けました。とくに「集合と位相」は、初めて接する者にとっては、すべての数学の基礎であるはずであるのに、同時に、それまで馴染んでいたものの見方の転換が迫られるタフな科目であったかもしれません。3年生で皆さんはこれらの基盤の上に、多岐の分野にわたる必修科目、選択必修科目に取り組みました。自分が数学の諸分野のどれに飛び込むのか、はっきりさせていく時期です。4年になったとき、皆さんは教員との「講究」がセミナーとして開始されました。分野の個性とともに、各々の学生の方の個性、そして各々の教員の個性との組み合わせにより、「講究」の実際の進め方は実に様々です。徒弟制度で初めて身につくものがあるように、「講究」によって初めて身につくものがあり、これは数学科特有の学び方といえるかもしれません。

このような勉学と研鑽を経て皆さんが身に着けたものを、大きく「知識」「技能」「価値観」の3つに分けて振り返らせてください。

- 知識： 講究を通じてご自分の専門分野を皆さんは深く精通されています。さらに、その専門分野が数学の中で他の諸領域と関連し合い絡み合いながら、互いに位置し存在することも、皆さんは良く認知されています。
- 技能： 必要な補助概念を適宜自分で作りつつ状況を分析し、課題にアプローチする方法を皆さんはご存じです。そして、こうしたアプローチの基盤となる数学的理論は、分厚く蓄積されたとき、信じがたいほどの射程を持つことを皆さんはご存じです。
- 価値観： 「根底からものを考え積み上げること」と要約されるかもしれません。数学では「厳密性」は、常に成立するものであり、ですから厳密性そのものはそれだけでは何の価値にもなりません。しかし、もしある命題がひとたび成立すると証明が保証するならば、命題は例外を許さず成立し、しかも命題のすべての大前提は明示的にあらわになっています。知のこのような在り方は、数学固有の特異な性格です。

皆さんはこれらの「知識」と「技能」と「価値観」を携えて、卒業されます。皆さんの中には、これから大学を離れて新しい世界に進まれる方がおられ、また大学に残って研鑽を積まれる方もおられます。いずれの場合も、皆さんの持つ専門性と価値観は、他の専門性と並び立ちつつ、大きな力をもつものです。

この力の獲得のため、皆さんは勉強を積み重ねてきました。勉強とは、基本的には、人類が積み上げてきた知的集積物の一端を学ぶことです。

一方、ご卒業後、皆さんは勉強を足場としつつ、勉強とは違う活動に携わることとなります。「仕事が面白くなってくる」という言い方がありますが、皆さんがこれから進まれる各々の領域において、

それに相当することが待っているはずで、皆さんのいる場所は、それらの新しい出会いを受け止める準備が整った場所である、といえるかと思います。

先の世界には新しい先達たちが待っており、新たな出会いがあります。既知の知識と既知の技能を習得する勉強のその先に、たとえばどんなことがあるのか、

ここでは恐縮ながら、私自身の個人的なひとつの経験をささやかな一例としてご紹介させていただきます。

私自身は学部卒業のあと、引き続き数学に携わりました。しかし自分のやっていることを「研究」と胸をはって呼んでみたり、自らを「数学者」と名乗ったりできるような気持ちとはまるで程遠いところにいました。20代の終わりのころ、海外のある場所で出会った年上の日本人研究者と、黒板の前で何かの議論をしていたときのことで、その方から突然「君の夢はなんですか」と尋ねられたことがありました。なんの気負いもない声で、淡々と、そう問うのがその場で実際に当たり前の問いであるかのように。そう言われて、私は戸惑い、何を口にしたらいいのか、一瞬言葉を失いました。

その後、数年、そのときの記憶は折に触れ思い出され、自分の夢といえるものは何だろう、としきりに自問されたものでした。しかし、やがてその問が意識の前面にのぼることが少なくなってきました。

なぜそうなったのか。おそらく、その理由は、その問が自分から遠いものになってしまったから、というのでは、少し違う気がします。当時、自分のやりたいこと、気にかかることとしては、まずは日々行う個々の作業や試行錯誤のレベルのものがまずありました。また、取り組んでる分野の、誰もがその時点で通念として持っている問題意識、あるいはいくつかの状況の結節点となっている予想など、客観的に存在しているともいえるレベルのものもあります。さらに、もっとずっと大きく、「夢」と呼べるようなあるいは「夢」というしかないようなレベルのものも様々に思い描かれました。分野の通念としての「夢」もありましたが、自分がそれまで行ってきた一連の取り組みを照らす仮想的な太陽のような「夢」もありました。

自分の夢とは何だろう、という自問は、このような思いの巡る領域が、次第に大きなレベルにまで遠く広がる契機になったのかとも思います。そして、今振り返ると、そのように巡る様々な事柄が、多層に分節化・構造化され、その構造を上下に、ある程度自由に動き回れるようになったとき、あえて「夢」という言葉でそのある方向を指さなくてもよくなったのだろうという気がします。

私が自分のやっていることを研究と呼ぶことに躊躇をさほど覚えなくなり、また自分は研究者というものといってよいのだ、と思えるようになるまでにはそれからまだ相当の時間がかかりました。しかし、その間は、私がそのような方向へ向かうために、大切なものであったと思います。私にその問を投げかけた方は、そのことを、きっと覚えていないことでしょう。しかし、私にとっては、とても大きな言葉でした。

皆さんもおそらくこれから多くの人と経験と言葉に出会い、大学学部生活の枠を大きく踏み越えた各々の場所で活躍されることになると思います。

皆さんの将来がすばらしいものでありますように。